

ブルードンの系列理論について

齊藤悦則

一. はじめに

ブルードンの最初の社会的発言は、1839年の『日曜論』においてみられるが、彼はそこにおいて、物理的現象の世界では、誰もが同意し、専断が排除され、一切のユートピアを許さない科学が存在するように、社会においても「人間の本性と能力、および人間の諸関係にもとづき、絶対的に厳密な社会科学 *science de la société* もまた存在しなければならない」(“*De la Célébration du Dimanche,*” éd. Rivière, p. 89)と考えた。だが、この著作につづく1840年からの一連の所有についての覚え書、すなわち、『所有とは何か』(1840年6月)、『所有に関するブランキ氏への手紙』(1841年4月)、『所有者への警告』(1842年1月)では、正義の視点からの現実批判(不平等や貧困の指摘)が行われ、厳密な学としての経済科学を生みださきれていない。

ようやく1843年9月の『人類における秩序の創造』*De la Création de l'ordre dans l'Humanité* (私が本稿で使用したのはリヴィエール版全集)において、批判(破壊)から創造への脱却が意識され、科学方法論が展開される。ここで確立された観点、方法は、1846年にあらわれる彼の主著『経済的諸矛盾の体系』の基本となった。

本稿で私が考察してみようとするのは、『人類における秩序の創造』で展開されたブルードンの科学方法論についてである。(彼は、その著作の第3章「形而上学」において方法論を展開している。)

さて、ブルードンの考えによれば、われわれをとりまく現実（社会）はもともと多様で複雑なものであるが、それはまた同時に一つの全体性をなして存在している。したがって、社会科学の目的は、そうした現実の合理的で体系的な認識である。ところが、科学に先だつ宗教や哲学は、こうした認識をかちとれなかった、と彼は言う。（彼は人間の認識の発展段階を、宗教、哲学、科学の3段階でとらえている）。

つまり宗教は人類の思考の最初の形態であり、そのようなものとして必然的なものであったが、宗教の本質は信じること *foi* にあり、認識することではない。そこにおいて人間の精神は宗教的瞑想の内において、全く受動的なものである（*Création de l'ordre*, pp. 125—126）。

そして哲学があらわれた。「哲学が、確かなるものへ向っての知性の飛躍であり、宗教のくびきに対する意識の反逆であり、自由の叫びであったとき、それは善であった。しかし、それが詭弁の源となり、疑念や片意地、矛盾や思いあがりの源となり、またあれこれのベテン師どもの専制支配の道具となっている今日、哲学はもはや唾棄すべきものとなっている」（*ibid.* p. 124）。

こうして、宗教・哲学はともに現代では無効なものである。人間の認識段階は科学へと進化する。「科学は秩序についての明晰で完全で確実にしてしかも合理的な理解である」（*ibid.* p. 38）。“そのために、学を学たらしめている所以のものを探りだそうとブルードンは考えた。そして厳密な科学のための厳密な方法論を、彼は独自に「形而上学」と呼んだのである。（彼の言う形而上学は後で述べる彼の系列理論と同義であるとみてよい）。

創造すべき科学のための方法を見出すためには、既存の諸科学の方法を研究する以外にない、と彼は考えた。というのは、個別諸科学が、その対象こそ多様なものであれ、それらが実際には同一の法則、同一の方法に従うものであるならば、それらの科学が共通に内包しているものをひきだすことが、すなわちあらゆるものに確実性を与えているものの発見につながる、と思われたからである（*ibid.* p. 131）。

こうして彼は既存の諸科学（算術、幾何学、天文学、物理・化学、動物学、

植物学、言語学)の検討を通して、それが共通に内包しているものが、対象の分割と再結合にあることを発見した。(これは分析と総合と言ってもよいだろう)。そして彼はそこで確認された原理にもとづいて、再び複雑で多様な現実を眺める。それははじめ一個の漠然とした不定形の全体性として知覚されるが、分析と総合を経て、それは再び一つの全体を形づくる。しかしそのとき、それはもはや意味のない不統一の全体ではなく、巨大な体系として整序された姿であらわれてくるのだ、とブルードンは考えたのである。

つまり彼は、よくいわれるように宗教、哲学、科学という人類の認識の発展段階に単純-複雑の系列をみたのではなく、現実世界をとらえるに、最も単純なものから出発して、厳密な確実性の経路を通じて、最も複雑、不明瞭な世界(彼はそれを経済社会の内にみた)へと到る、いわば上向の過程に単純-複雑の図式を描きだそうとしたのである。

二. 系列の分析

すでにみたように、ブルードンは諸々の科学の基本的存在条件を、諸対象の分割と結合にあるととらえた。そして対象が分割され、結合させられているとき、ブルードンの言葉を借りれば、「蜂の巣の穴、くもの巣、網の目、綾織の文様のように、段階づけられ、整列し、接続され、織りなされ、均斉化され、整序されて」(ibid. p.137) いるとき、そうした形態を彼は系列*série*と呼び、そうした分割と結合の作業を系列化*sériation*と呼んだのである。

彼は言う、「系列の理論は、あらゆる種類の観念(数、大きさ、運動、形態、関係、感情、行動、権利と義務)を分解・構成する術 *art* である」(ibid. p. 171)。また、「この〔系列という〕最高法則は……次のように定義される。すなわち、多様性における総合的直観 *intuition synthétique*、分割の中の総合化 *totalisation*」(ibid. p.233)。

以下、系列の分析を通じて得られる系列の諸要素についてみよう。「系列は3つの要素に分解される。すなわち、視点 *point de vue*、素材 *matière* また

は単位 *unité*——これはしばしば視点と同じものなのだが——，そして最後に根拠 *raison* または諸単位の関係である」(ibid. p. 234)。そこでこれを，単位，根拠，視点の順にみでみることにしよう。

a) 単位

系列が対象の分割，結合であることから明らかなように，系列はまず分割された個々の部分からなっている。こうした個々の部分を彼は単位と名づけた。「系列はその要素として単位をもつ。……絶対的単位とは，諸事物の中において，差異のないもの *indifference*，区別されないもの *non-difference*，同一性 *identité* なのである」(ibid. p. 171)。

それでは系列というものにおける単位の発見はどのようにしてなされるか。「まず系列が，一つの限界づけられた集合，あるいは一つの規定された全体性 *totalité* として識別される。次いで，その全体性において諸々の部分が認識され，ここに数多性 *pluralité* の概念が獲得される。そして最後に，その諸部分を統一している同一性の関係，あるいはまた部分それ自体が把握されることによって，われわれは単位概念に到達するのである」(ibid. p. 268)。ここでわれわれは，上にみた単位の発見の経路を逆にたどることによって，単位が系列を形成するに到るプロセスも，そのおおよそが把握できるであろう。つまり，「系列は単位のアンチテーゼである。それは単位の反復，単位の多様な配置と結合によって形成される」(ibid. p. 172) のである。それは次のようにもいえる。「系列を発見することは，多数の中に単位〔単一性〕を知覚することであり，分割の中に総合を知覚することである」(ibid. p. 192)。

単位についてブルードンの挙げた例によれば，歯車における単位は歯であり，碁盤においては目であり，多面体においては，その立体の内部の一点を頂点とし，それぞれの面を底面としてできあがる角錐がその単位である。また，動物界・植物界において系列の単位は，あるいは類であり，種であり，そしてあるいはそれぞれの個体である。

b) 根拠

系列は単位よりなる。だが一単位では系列をなしえない。系列はすくなくとも二つの単位からなっていないなければならない。このように系列が複数個の単位からなっていることから、これらの単位間の関係が検討されねばならないことになる。また、その関係が系列にとってどのような意味をもつものであるか、ということも見てみなければならない。

ブルードンによれば、世の中のさまざまな諸事象にはそれぞれに固有の秩序があり、つまり、さまざまな形態の系列が存在している。こうした系列における形態の無数の差異は、実は系列を構成する諸単位の間関係によって生じるものなのである。「系列に形態を与えるものは、それが同一性、相等性 *égalité* あるいは相異性、力 *puissance*、進歩、構成などどのようなものであれ、諸単位間関係である。諸単位間関係を、われわれは系列の根拠と呼ぶことにしよう」(ibid. p. 174)。

系列に形態を与えるさまざまな関係について、彼は次のような例で説明している。例えば、のこぎりの歯や歯車の歯にみられるのは同一性関係である。十百千万とわけられた数の単位においては類似 *similitude* の関係がみられる。色における光の波長や物体の落下における加速においては進歩の関係がある。そして、人体の四肢、植物の各器官、絵画・彫刻・文学作品の各部分には構成の関係がある、など。

このように、諸単位間関係が系列の形態を規定しているのであるが、このことは単位をそのままにしておいて、その相互の関係のみを変化させれば、必然的に形態、様相が一変することを示せば、より一層明確なものとなろう。

ここでもブルードンの挙げた例でみてみよう。まずここに四辺形の平面がある。これがその一辺を軸として回転すれば、その運動によって形づくられる立体は円柱である。また四辺形が垂直方向に動けば、できあがる立体は直方体である。これは形態と関係との間のつながりを示している。つまり、この場合でいえば、平面がその辺のなす全ての線の動きに伴って運動することでは全く同等なのだが、それぞれの線の動きの連さについてみれば、前者は軸に対する遠

近で速さが異なり、後者の場合は全く同じである。すなわち、後者は同一性の関係にあり、前者は進歩の関係にあるのである。

このように、系列の根拠は変更可能なものであるが（その場合系列の形態が変化する）、一つの系列の内部に「おいては、系列の根拠は不変のものでなければならぬ。例えば、一つながりの数字が、ある部分では10進法に、またある部分では12進法に従っているとしたら算術は不可能なものとなる。こうした根拠の変動は混乱をもたらし、秩序（すなわち系列そのもの）を破壊するものである。「系列が、われわれの呼ぶところの根拠、あるいは関係という共通の絆 *lien* で集合させられた単位のあつまりであるなら、系列を破壊、あるいは少なくとも変化させるには、根拠を不安定にすればそれで充分である」(ibid. p. 192) と彼が述べる時、それは以上のことを示したものである。

c) 視点

系列の要素のうち、単位と根拠を以上にみてきたが、これらは系列がすでに形成され、あるいは知覚されていることを前提として得られた概念であった。しかし現実においては、諸事象はその多様性の内に埋没して、系列すなわち秩序を知覚することがそもそも極めて困難なものなのである。「したがって、問題は、いかなる条件において系列は知覚されるのか……ということである」(ibid. p. 187)。系列はまず分割から出発するものであるとすれば、眼前の対象をどのように分割するか、ということが問題となる。

植物界を例にとると、さまざまな視点が想定される。つまり、葉の形、花、実、気候、用途など。しかし、視点は人間（観察者）が恣意的に決定できるものだろうか。上に想定されたさまざまな視点は、分類のための原則となりえても、学（植物学）を学たらしめる唯一の視点ではありえない、とブルードンは考えた。より一般的で普遍的な視点が確定されねばならない、という。

「あらゆる問題のうち、まずなすべきことは究明しようとしている対象において視点を確定することである」(ibid.)。このように視点は、系列の要素の一つであり、最初に確定さるべきものなのである。視点の確定は、系列がどのよ

うな単位でできあがっているのかを、つまり系列の素材を確定することと同義である。「系列の知覚は、全くこの〔視点の〕確定の内にある」(ibid.)。

だが、事象の多様性の前で、視点の確定の困難さは残されたままである。ブルードンはその確定のための確実な手段を提示しない。しかし彼がもっとあとのところで、観念の進化を直観（個別的観念）—一般的観念—純粹観念としての概念ととらえる中で、「単位の概念は系列の、あるいは系列の諸項 *termes* の直観にほかならない。なぜなら客体 *objet* の側からいえば系列は単位の関係によって形成されるように、主体 *sujet* の側からいえば単位はそれを内包している集合の分析によってヴィジブルなものとなるからである」(ibid. pp. 267—268) と述べているように、視点はまず直観によって得られる、と考えることができよう。それは次のようにも言われる。「系列の知覚は、常に突然で急激なものであり、しかも完全なものである。系列はじわじわとゆるやかにあらわれたり、部分的な形であらわれたりするものではない。それは突然、純粹かつ明瞭な形であらわれ、……[そしてまた]、それはしばしば、全く予期しなかったときに……偶然という形で……あらわれるのである」(ibid. p. 191)。

三. 系列の進化

ブルードンは、超経験的な純粹数学 *mathématique pure* の成立を検討する中で、系列の進化という性格を見出した。つまり、基本的な数学的系列が与えられれば、そこから数学の形成と発展の法則を得ることができる、と考えたのである。系列の展開 *déroulement*、用語の変形は、進化の法則 (ibid. p. 145) にもとづくなら、正確さを喪失するものではない。ある系列は他の系列を内包しており *impliquées*、系列の系列化、系列の複合化がおこなわれる。こうした系列の進化は、系列の一般的法則である、と彼は考えたのである。

すなわち、彼の最初の意図は、極めて複雑で錯綜し、かつ極めて不明瞭な世界である経済領域において、数学的厳密性をもつ理論をうちたてることにあったのだが、そのためには、最も確かなものとしての自然法則にも通ずる基本的

系列が与えられれば、そこから系列の進化を通して系列の最終段階である体系的な系列、あるいは複合的系列へ到達すればよいと考えたのである。多様で複雑な現実世界は、複合的系列によってのみ把握可能なものとなるのである。

以下、基本的系列から複合的系列へと到る系列の進化をたどってみることにしよう。

a) 自然的系列と人為的系列

ブルードンは最も基本的な系列として自然的系列 *série naturelle* をおく。彼はこれを次のように定義づける。「系列は、それが対象に固有で特殊なものであるとき、また、それがその本性 *nature* と特性 *propriété* とに由来するものであるとき、自然的である」(ibid. p. 176)。だが、この定義づけからわれわれは自然的系列の具体的イメージを得ることができない。そこで、この自然的系列と対をなしている系列、すなわち人為的系列 *série artificielle* と彼が呼ぶところのものをみとめることにしよう。彼の定義づけによれば、「系列は、それがそれに固有の対象から、それとは異質の他のものに移されたとき、人為的である」(ibid.)。この人為的系列については、彼は次のような例をあげている。つまり、花壇のシンメトリックな帯、五点形に植えられた樹木、あるいはきちんと剪定された樹木、ABC順にならべられた人名、背の高さの順に整理している人間のあつまりなどである。

自然的系列と人為的系列のこのような対置と、「結局すべての系列は一つの法則の表現とみなしうる」(ibid.) という彼の言葉から、自然的系列とはすなわち自然法則、あるいはより極端な言い方をすれば、物理的諸現象に貫徹する法則を直接表現したものとみてよいのではなからうか。そしてそれに対して人為的系列とは、自然法則の間接的表現であり、ブルードンの言葉を借りれば、「自然的系列の置き換え *transposition*」(ibid. p. 177) にほかならない。すなわち、「自然において系列は、それぞれの固有の対象に従って混乱もなく、衝突もなく、発展していくものである。そしてそのあと、人間が土地や動産の君主としてあらわれ、自然的系列の置き換えによって、第二の創造をはじめ

のである」(idid.)。

先にみた人為的系列の例からも類推できるが、芸術あるいは産業の生産物の大半は人為的系列に属している。このように人為的系列は人間にとって多くの有用性をうみだすものであるのだが、しかし、われわれはここで人為的とは恣意的と全く異なるものであることに注意しておかねばならない、と彼は述べている。「人間は系列を創りだしもしなければ、想像することもしない。彼はただそれを発見し、置き換えるだけなのである」(ibid., pp. 176—177)。つまり、人為的系列とは、自然的系列の補助 *auxiliaire*、補完物 *complément* にすぎないのであって、もしそれがその域をこえて、自然的系列の役割を横どりしようとしたり、自然的系列を誤認していたりするなら、そのとき人為的系列は有害なものとなる、というのである。

このように人為的系列は、基本的な系列としての自然的系列に内包され、それから出発する系列の進化の第一歩をなすものであるといえる。このことは次のようなブルードンの言葉にも示されている。すなわち、「人為的系列とは、すでに述べたように、その固有の対象から抽象され、別のものに置きかえられた自然的系列にすぎないのだから、その形成にあたって従うべき方法は、自然的系列におけるものと同一なのである」(idid. p. 128)。

さらにまた、自然的系列と人為的系列との関係について述べるなら、この二つの系列は、先に見た視点(系列の要素としての)差異としてもとらえることができる。すなわち、「視点は現実的 *réel* であるか、またはフィクティブなものである。前者〔自然的系列〕の場合、系列は対象に固有の自然的なものである。後者〔人為的系列〕の場合、系列はわれわれの悟性の創造物であり、それはその全き使用のために一つの対象から他の対象へと系列を組みなおしたり、移しかえたりするし、また議論の必要上から、あるいは詩や美術の装飾のために、一種の慣習や、理解しやすい群をつくりだす。そこでは、視点は客観的な系列の上におけるものと同様の働き方をする。またそれは、本質的にかげはなれた諸々のタイプを、たくみで気のきいた形 *figures* に結合したりするのである」(idid. p. 234)。(この言葉の後半で述べられているのは、人為的系

列のより高次の形態である類似的系列のことなのであるが、これについては次項で説明する)。

b) 類似的系列

これまでわれわれは事物と事物との間に系列をみてきた。しかし、系列と系列との間にもやはり系列が存在するのである (系列の系列化)。その最も素朴なものがここにみる類似的系列 *série similiforme*, あるいはアナロジーである。

「対象, 単位, 根拠が全く異なっていくつかの系列をみてみると, それらの間には, しばしば独特な類似 *ressemblance* が見うけられることがある。……この類似は次のことに由来している。つまり, 系列の基体 *substratum* をなす原子的素材 *matière atomique* であれ, 系列を決定する力 *force* であれ, 全ての系列の要約的表現である要素の形態であれ, それらは先験的には一個のものであり, 同一であり, 常に等しいものであり, ただこの3つのものはそれらが結合しているその量, 分割, 比率のみが異なっているのであって, 全ての系列の間には, ある共通したもの *quelque chose de commun* が必然的に知覚されるのだ, ということに由来している」(ibid. p. 178)。

このように, 類似的系列は, 極めてかけはなれた系列の間に, なにかしら共通のもの, 系列的同一性を発見することによって新たに構築された系列なのであり, そしてそれが系列を単位とした系列であることから, 一層高次の系列へたどりつくための重要な足がかりをなすものだといえよう。

だがわれわれは, 類似的系列の利用のしすぎに気をつけなければならない。なぜなら, 類似的系列は外見上の類似から出発しているため, しばしば偶然的な類似にすぎないものについても, そこに同一の原理や法則があるかのような錯覚をわれわれにもたらすのである。本来的には, 法則の同一性が証明されてはじめて, この系列は承認されるべきであるのに, しばしばそれが逆転せられて, 類似があるから法則の同一性があるのだ, というように推論されてしまう。このような危険性にもかかわらず (あるいは無自覚的に), これは極めて

便利な方法であるため、多くの論議の中で頻繁に使用されているものである。

アナロジー〔類似的系列〕とは、もともと、「ただ単に、偶然の類似が発見された諸事物の間の系列的同一性の仮説以上の何ものでもないのである」(ibid. p. 128)。そこでわれわれは正しいアナロジーとまちがったアナロジーとを区別しなければならないのであるが、正しいアナロジーはここではまだ充分与えられず、後述する弁証法的系列においてその完全な姿をあらわすものなのである。したがって、この段階でわれわれが類似的系列について得る最良の例証は、詩と雄弁の中にみられるものにとどまる (ibid.)。

c) 論理的系列

先に述べた類似的系列とは、多様性の内にある諸事象(系列)の中から類似した事象(系列)を、A, B, C, ……と挙げ、その類似がそれらの間に共通したあるもの、系列的同一性に依っていることを仮定して、それを $A=B=C\cdots$ と並べることにあった。そのとき、これらの諸事象(系列)をその系列的同一性の確認にもとづいて要約し、あるいは「合計し *sommer*, 総合する *totaliser*」(ibid. p. 185)と、そこに論理的系列 *série logique* が存在する。

たとえば、赤、黄、緑、青、紫といったものは全て「色」という共通の表現を得る。そのとき「色」という言葉はそれらの一つ一つを、あるいはそれらの総体を指している。これが論理的系列なのである。同様に、音や匂い、また動物、植物など全て論理的系列なのである。

このようにみると、論理的系列とは類似的系列の高次化にすぎないことがあきらかとなる。言語、あるいは抽象的記号はアナロジーによって準備され、論理的系列によって洗練されていくことがわかる。

「論理的系列は、一種の慣習 *convention* であり、科学以前に創りだされたものであり、事物のもろもろの本性、性質 *qualité* を、あるいは精神のもろもろの視点を、ある要約された仕方では表現するものである」(ibid. p. 182)。

しかし、「色」という表現にみられたように、論理的系列は、「議論の必要上から発明され、なんら現実的なものをあらわさない。それは一つの人工的な

系列であり (ibid.), また, それは「客観的実在から独立した精神によって生みだされ, 経験に先だって生みだされた人工的な様式 *un genre factice* である。更に, この系列は人間の言語の大半を構成している」(ibid. p. 184)。

「実際, 論理的系列とは, 枚挙の要約 *énumération abrégée* であり, 同一の視点によって考察され, その他には何の絆ももたない諸事象を, 共通の, そして慣習にもとづく記号の下で圧縮した一種の代数的な引き算 *réduction algébrique* である」(ibid. p. 185)。

d) 弁証法的系列

「素材, 原因, 原理, 形態について, 全くかけはなれた諸観念を, 単一の視点に導き, そこから, 等しい同一の諸項 *termes* で, 一つの単純な系列 *série simple* をつくる。ここに推論というものの作業がなりたっている。このように, 全く別の結合しがたい *inassociable* 関係の下にある諸々の項の比較から, 反省を通して, つくりだされる系列を弁証法的系列 *série dialectique* と呼び, それを役立たせることを教える特定の理論を系列の弁証法 *dialectique sérielle* と呼ぶことにしよう」(ibid. p. 193)。

先に述べた論理的系列との関係でみるなら, この弁証法的系列は, 論理的系列を単位として成立するものであり, またこれはそうした論理的系列のまた一つの要約でもあることから, 弁証法的系列はそれ自体一つの論理的系列である, とブルードンは述べている (ibid. p. 196)。従ってこのことから, 弁証法的系列が論理的系列に内包された系列であり, その進化した形態であることがわかる。素朴な, あるいは低次の論理的系列がせいぜいのところ抽象名詞にしか到達しなかったのに, つまり「事物の本性或性格を, あるいは精神の視点がある要約された仕方で表現するもの」にとどまったのに対し, 弁証法的系列は, そうした論理的系列を自らの単位とし, しかも「もっともかけはなれた諸対象をあつめたもの」(ibid. p. 200)なのである。

きわめてかけはなれ, 異質のものとして映る諸事象を系列化することは, すでに類似的系列のうちにみえてきた。しかしながら, そこでとらえられたアナロ

ジーは、「諸事象の間の系列的同一性の仮説以上の何ものでもないのである」から、正しいアナロジーの全き姿をそこで得ることはできなかった。正しいアナロジーが成立するためには、そこにおいて系列的同一性が確立、確認されねばならなかった。それを準備するのが論理的系列である。論理的系列は、諸事象をそれらの間の系列的同一性にもとづいて「一般化 *généralisation*」(ibid. p. 184) することによって成立する。このことを通じて、アナロジーは正しいアナロジーへ進化する。これが弁証法的系列なのである。

ブルードンによれば、「弁証法的系列は、思考の女王であり、あらゆる観念の唯一にして一般的な型であり、真理の絶対的条件であり、明証の基準である」(ibid. p. 193) ということになる。

また彼はこの系列の特徴を次のように列挙している。

「1. 弁証法的系列においては、素材あるいは対象についてきわめて多様なものである諸単位は、それらの視点に関して同一性の関係にある。

「2. この系列の単位の数は、ほとんど常に無制限である。

「3. 弁証法的諸単位が次々に起こるといふ秩序(順序)は系列とは無関係である。

「4. 弁証法的系列は最もかけはなれた諸対象をあつめたものである」。(ibid. pp. 199—200)

こうしてみると、ブルードンの言う「弁証法」というのは、現象的には非和解的で異質の諸事物の中に同一性の関係の存在を見抜くという方法を指すものであるといえよう。このことから、弁証法的系列はまたもう一つの特徴をもつことになる。彼は言う、「弁証法的系列の中で、視点と根拠は異なったものではない。そのことがすなわち、この系列のメカニズムと構成をきわめて単純なものにしている利点(長所)なのである」(ibid. p. 193)。つまり、この系列における視点とは異質のものの中に同一性の関係(の存在)を見抜くことであり、根拠とはまさしく異質の事象の間の同一性の関係なのだからである。

c) 体系的系列

ブルードンの意図は、複雑で多様な現実をその全体性においてとらえることにあったが、先にみた弁証法的系列ではまだそれをとらえきれないと彼は考えた。なぜなら、そこにおいては系列の視点が単一であり、これでは複雑な現実世界を一つのタブローとして、つまり生き生きと有機化 *organisé* されたものとして描ききれないからである。こうして彼は、単一の視点にもとづいて形成される弁証法的系列を、広義の弁証法的系列の第1段階である、とした (*ibid.* p. 201)。

求められるべき全体性は、錯綜した視点にもとづく諸系列の整序化によって、把握可能なものとなる。これが弁証法的系列の第2段階をなし、系列の進化の最後のものである体系的系列 *série systématique* である。

「系列の異なった諸項が、それらの一つ一つの継続的な変形によるものであるとき、あるいは同じことになるが、それらの諸項が一つの基本項の提示するさまざまな視点によって与えられるものであるとき、あるいはまた、その下に系列の諸単位があつめられている視点と根拠がふえていく *multiple* とき、そのとき、一つのタブロー、つまり頭からつま先までそろえ、手足と諸器官をもつ一つの複合的系列 *série composée* が形成される。体系 *SYSTÈME* が存在するのである」 (*ibid.*)。

このように体系的系列、あるいは複合的系列は、なによりもその視点と根拠の多数性 *multiplicité* をその最大の特徴とする。「単純な系列に形態を与えるのは、あるいは相等性、あるいは進歩、力など、系列の諸要素を集合させている関係である、複合的系列に形態を与えるのは、更に、視点の数多性 *pluralité* と、配列 *disposition* である」 (*ibid.* p. 234)。

体系はもちろん、さまざまな形態をもっている。例えば、植物学などにみられるように段階づけられた形態、天文学のようになを中心とし、なにかその軸のまわりを回転しているかというような形態、詩や美術にみられる調和的な形態などである。これは、種として区分されたそれぞれの系列を、また大きく類として分類する作業として考えれば理解しやすいものとなろう。

ここでわれわれは、この系列のもう一つの大きな特徴に気づく。すなわち、

第1段階での弁証法的系列は、諸項間の同一性の関係によつて形成されるのだが、第2段階での弁証法的系列(すなわち体系的系列)においてみられるのは、諸々の項の間での進歩(あるいは退歩)の関係である、ということである。

また、系列の進化の最終段階である体系的系列が、基本的系列としての自然的系列に内包され、従つてそれ自身自然の法則、あるいは客観法則に合致したものであるということにも注意しておかねばなるまい。つまり、ブルードンによれば、哲学、政治、文学、芸術における体系は、決して任意の発明物ではないのである。「それ〔体系〕は常に、人間の自由意志から独立した必然的な概念であろうし、意識や理性によるものではありえないであろう。一言でいえば、われわれの観念についても、有機体や無機物についてと同じことがいえるのである。つまり、それら自体、自然のある定まった秩序に従つており、そして交互に、視点や根拠として、あるいは歯車や軸として、それらの結合や体系の無限のヴァリエエを生むのに役立つものなのである」(ibid. p. 216)。

このように彼の系列の理論においては、まず基本的な系列として自然的系列が与えられ、それに内包され、そこから進化したものとして人為的系列が与えられ、以下同様に、系列の高次化、複合化によつて、類似的系列、論理的系列、弁証法的系列、体系的系列が与えられるのである。

複雑で多様な現実をとらえるには体系的系列によらねばならないのだが、これまでの人々は系列理論を充分理解していなかったため社会科学は不完全なものであった、と彼は考えた。彼によれば、体系的系列は、現実をまず一個の全体性としてとらえ、そして感覚への与件をもとに直観によつてそれを分割し、諸単位間に関係を見出すことによつて系列化し、そして複数の視点にもとづく複数の系列を更に系列化することによつて、ついに巨大な体系として**整序化**された現実として再びとらえなおすものなのである。